

第14回公開シンポジウム

テーマ：「フリーランスとギグワーク：可能性を広げる働き方の検討」

コーディネーター： 石山恒貴氏（副理事長補佐・法政大学）

パネリスト：平田麻莉氏（プロフェッショナル&パラレルキャリア・フリーランス協会代表理事）

檜山敦氏（東京大学先端科学技術研究センター特任准教授）

藤本崇氏（ストリートアカデミー株式会社代表取締役 CEO）

開催日時：2021年10月17日（日）13:30～16:30

会場：オンライン開催

シンポジウム要旨

1. 石山恒貴氏「問題提起」

- ・ デジタルプラットフォームで契約して働く人は、ギグワーカーと呼ばれる。
- ・ 近年、ギグワークを含む雇用によらない働き方全般に従事する人々は、フリーランスと呼称され注目されている。
- ・ 雇用による働き方と雇用によらない働き方においても、契約形態や時間・場所の制約にグラデーションがあり、多様化が進行している。
- ・ フリーランスには、騎士・英雄言説と従僕言説という2面性がある。
- ・ ギグワークにも、リモート性と裁量性に関して多様性がある。
- ・ フリーランスとギグワークに関して、安定した雇用を理想と考える暗黙の前提が、無意識のバイアスにつながっている可能性がある。
- ・ 同時に、フリーランスもギグワークも多様化が進み、雇用／雇用によらない、という二元論も通じなくなっている。

2. 平田麻莉氏「フリーランスの課題と可能性」

- ・ 協会は、「誰もが自律的なキャリアを築ける世の中へ」ことを目指して活動
- ・ フリーランスとは、「特定の企業や団体、組織に専従しない独立した形態で、自身の専門知識やスキルを提供して対価を得る人」
- ・ 会社員とフリーランスの境界線はますます曖昧に→すべての働く人に中立なセーフティネットが求められている
- ・ フリーランス（業務委託人材）は「労働者」ではない
- ・ 働き方の違いに関わらず社会保障が提供される必要性を感じているフリーランス 95.7%（フリーランス白書 2021）
- ・ アフターコロナの先にある未来は、流動化する個人、プロジェクト化するチーム、ネットワーク化する組織であり、それに合致する社会システムの構築が必要

3. 檜山敦氏「モザイクワークの課題と可能性」

- ・ 高齢者を労働資源として考えると→時間的制約、空間的制約、経験・能力が不均一、

就労に求めることも多様→不均一で多様性に富む(エントロピーの高い)労働資源。

- ・高齢者クラウド：モザイク型就労（労働力の仮想化）→時間モザイク、空間モザイク、スキルモザイク。
- ・ Gathering Brisk Elderly in the Region、地域の元気なシニアを集める→GBER: 地域活動へのマッチングプラットフォーム。
- ・ ジョブ型就労社会への転換に対する科学技術的ボトルネック→スキルベースのマッチングを行うには不十分なデータ。
- ・ 人の仕事を奪うのではなく、人と仕事、社会をつなぐ AI が重要。

4. 藤本崇氏「スキルシェアサービス・ストアカについて」

- ・ストアカは「ストアカ」は日本最大級のまなびのマーケット（登録生徒数 58 万人、登録先生数 3.8 万人）、オンライン上で検索～予約・決済までワンストップで提供。
- ・まなびの選択肢を増やし、自由に生きる人を増やす」がミッション。
- ・老若男女問わず、幅広い世代・性別が利用、特に 30~40 代・女性ユーザー（生徒）がボリュームゾーン。
- ・講師の対面/オンラインでの教室開催に必要なリソースをワンストップで提供、独自のカテゴリでファンコミュニティを創り出す講師層が出現。
- ・スキルシェアが注目される背景→副業・複業推進の文脈と人生 100 年時代構想の推進。

5. パネルディスカッション

- ・雇用前提という枠組みを外した、多様化の理解がまず必要である。
- ・フリーランスとギグワークに関して、事業者の良さ、専門性を追求する良さの理解をすることも重要である。
- ・若い世代においては、複数のコミュニティに属するという考え方に抵抗がなくなっており、1社への就社を前提とした考え方だけでは通用しなくなっている。
- ・雇用によらない働き方の議論をすることは、逆に、雇用者（特に正社員）の課題も照射することになる。
- ・多様な働き方を個別に検討するというより、中立性とセーフティネットで網をかける方向が必要ではないか。